

考古学と文献史学を渡す歴史的発見

(朝酌矢田Ⅱ遺跡、松江市、2020年調査) 岩崎 孝平

「国引き神話」をご存じでしょうか。島根・鳥取の皆さんにこう尋ねると、大半の人が首を縦に振るのではないのでしょうか。そう、『出雲国風土記』（733年成立）の冒頭を飾る有名な国土創世神話で、出雲国の成り立ちに関わる物語です。まずは今一度、国引きの様子を整理してみましょう。

出雲が狭い国であると感じた八束水臣津野^{やつかみずおみづぬ}という神は、①鋤^{すき}で海の向こうの土地を、②大魚を一気に突くように突き刺し切り分けた。そして③何度もねった綱を大地に引っ掛け、河船を引っ張るようにゆっくりと引き寄せたのである。

この壮大なシーンに盛り込まれた比喻表現は、何ともリアルで特徴的だと思いませんか？ 諸説ありますが、実はここに、古代人の様々な労働の様子が秘められています。例えば、①の鋤は土地開発や農業に欠かせない土木具です。続いて②は漁業を、③は陸上から船を引き寄せる様子を示します。このように、国引き神話は古代人の集団労働、特に土木業や漁業を象徴したものと捉えることもできるのです。

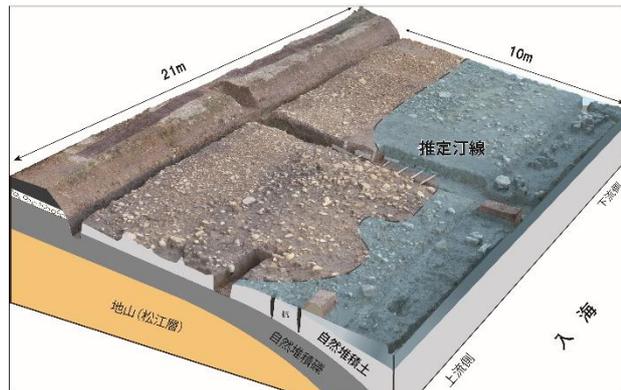
今回は、こうした古代の息吹を肌で感じた発掘調査例を1つご紹介しましょう。取り上げるのは、大橋川北岸に位置する松江市朝酌町の朝酌矢田Ⅱ遺跡です。朝酌町といえば、風土記に記載が多い地域として知られます。例えば、船1艘^{そう}を備えた「朝酌渡」^{あさくみのわたり}（大橋川を渡河する官営の渡し場）があること、交通の要衝でなおかつ漁業が盛んなこと、四方から人々が集まり市^{いち}をなしたことなどが読み取れます。当時は官民の船が行き交い、市には近辺で採れた豊かな水産物が並んでいたことでしょう。

当遺跡ではこれらを裏付けるように、船揚げ場や荷揚げ場の可能性がある石敷きが姿を現しました。石敷きは風土記が書かれた奈良時代の土木工事によるもので、さらに土錘（網に付けるおもり）などの漁具も一緒に出土したのです。

調査を担当した私は、大橋川を眼前に

ふと国引き神話の描写を思い出しました。まさにそこに、躍動する人々の姿と風土記の世界を見ているようでした。皆さんもぜひ、風土記解説本を片手に朝酌の地へ足を運んでみてください。今も変わらないのどかな自然と1艘の渡船、往来するシジミ漁船に、ありし日の情景を想像せずにはいられないはずです。

（島根県埋蔵文化財調査センター主任主事）



発見された石敷きの3Dモデル。

川側に緩やかに傾斜し、所によって石の敷き方と色調が異なる。



大橋川南岸から「朝酌渡」推定地を望む。

矢田渡船（中央）が1艘あり、両岸には漁船が複数係留してある。